台湾日本語文学報

33

【刊行の辞】
曾 桂 『台湾日本語文学報』 33号刊行序文………………… 1

【特別寄稿】
加藤 典洋 村上春樹の国際的な受容はどこから来るか
一その社会的背景と文学の多層性一………………………… 3
金水 敏 役割語研究の10年…………………………………… 25
小森 陽一 通過儀礼を視座とした村上春樹の最新長編小説『色彩を持たない
多崎つくろと、彼の巡礼の年』論
一『記憶』と『歴史』との関わりを中心に直す………………… 45

【論 文】
曾 桂 3・11以後の日本文学の版幅
一それでも三月は、またにおける『原発』の課題一………… 57
下岡 友加 健団師とベテラン師一芥川龍之介と黄霊芝一…… 83
張 雅婷 リビ英雄「満州ウノプレス」の創作動機
一『安部先生』像の形成をめぐって………………………… 103
篠 健雀 日本語の程度表現一形容詞の非典型的用法を中心に一… 125
王 世和 未定から見た名詞止め表現の用法…………………… 151
蔡 珉善 日本語読解教科書・論説文・漫画データに基づく計量的語彙
調査一異なるテクストタイプにみられる語彙特徴を中心に一… 173
羅 慶立 現代客家語に見る日本語借用語の表記………………… 199
施 信余 遠隔接触場面の話し合いに見られるコミュニケーション・ストラ
テジー一調整行動の分析を中心に……………………… 225
落合 由治 311震災と原発爆発に対する日本の言論界の認識
一新聞界と文化界の言論比較から一……………………… 249
羅 喩勤 初中級会話授業への異言語話者接触活動導入の可能性
一非対面接触場面での話題選択の特徴を中心に一…………… 275
簡 喩花 明治30-40年代における修養主義に関して
一松村介石の場合を中心に………………………………… 297

【活動彙報】
2013年1月～6月例会要旨および活動報告…………………… 323

2013年6月
台湾日本語文學會
台灣日本語文學報

33

台灣日本語文學報33
台灣日本語文學會
2013年6月
台湾日本語文学会 2013 年 1 月～6 月活動彙報
例会要旨
本学会では 2013 年 1 月から 6 月まで以下の内容で例会および研究大会協賛を行った。なお 2013 年 7 月以降の活動は、次号 34 号に掲載する。

（1）290 例会
発表者①：王 嘉臨（淡江大学助理教授）
発表者②：徐 佩伶（淡江大学助理教授）
発表要旨：2013 年 1 月 19 日（六）上午 10:00－12:00
発表者①：王 嘉臨（淡江大学助理教授）
発表要旨：1980 年代以降、鉄道など交通網の全国規模での整備
拡充により、旅の思索として一層化し、観光旅行（ソリティア）の時代が到来した。そして、乗物を使った多くの小説が作られ、乗り物が他者との出会いの「場」
として多用された。論者はこれまで志賀直哉他者認識の問題について研究してきた。本発表では、前述した一九八〇年代に特徴的な現象を踏まえ、志賀直哉の
「網走まで」を取り上げ、主人公が乗物で接した人々と
どのような関係しているか、その他者認識の様相を分析
する。また、時代に発表された、乗り物を背景にした
ほかの小説との比較を通して、「網走まで」という小説の
特徴と問題点について考察を加える。
発表要旨：日本語における非対格動詞文の一考察
発表者は、日本語における非対格動詞の他動詞化（語
 Jacket 依中化）の統語現象を見、主語が目的語に対するの働
きかけが意味的に薄い「非対格的他動詞構文」を中心に考察する。一般の他動詞構文は、主語が目的語に対して何らかの影響が及ぶ文であり、それに対する「非対格的他動詞構文」は、形として一般の他動詞構文と同じだが、主語が目的語に対してなんらかの働きがない。むしろ、目的語を含む動詞句が主語の状態を表す「自動詞的な」文になっている。本発表は日本語における「非対格的他動詞文」の実現を語彙的、統語的、ないし意味的な側面から考察する。結論的に、「非対格的他動詞文」の認可は、動詞の意味、主語の意味役割、主語と目的語との意味関係などにいずれも関係するということである。

（2）第291例会

時 間：2013年2月16日（六） 上午10：00－12：00

地 点：台北市YMCA城中會所008室（台北市松山區19號）

発表者1：伊藤 鈴彦（雲林科技大學兼任助理教授）

題 目：助詞ハとガ

評 論 人：落合 由治（淡江大學教授）

発表要旨：ハは文の主題（題目）を提示する。これについての議論を提體回題と呼ぶ。草野清民は変主（主語）のほかに仮文主＝総主（主題）ハがあるとした。山田孝雄はハの分離結合論を主張し、ハは選択肢から判断し、選択論理的判定語であり、ハは述語に勢力を及ぼすという文節論を論じ、ハは話手が主観的に判断した感想を述べる提示語であると述べた。松下大三郎は出題語ハは判断の対象を提示し、判断文であり、題目は判定の対象の予定的提示であり、解釈に先だち定められ、旧観念となり、前が題目、後が解釈であり、旧観念＝既知と新観念＝未知を論じた。佐久間啓はすべてに通じてそう言える、現前の既知の事物について判断する場合、ハが使われると述べた。三尾砂は文の類型を現象文、判断文、未展開文、分節文に分
け、ハの提題性を論じた。三上章はハの兼務（ノ、ガ、
二、ヲ、デは、ハで言い換え可）について述べ、主題＝
主語を批判し、ハ＝主題、ガ＝主格によって機能が分け
られていると論じ、主語従属論はハを主題、ガを主格と
する階層的構造へ位置づけた。ハは判断文で使われる主
観的性格、文全体を修飾する影響力が強い性格、五助詞
に言い換え可の万能型性格をもつ。
発表者②：蔡 鳳芸（中国文化大学助教）
題 目：日本語読解教科書・論説文・漫画データに基づく計量的
な語彙調査—異なるテクストタイプにみられる語彙特徴
を中心に
評 論 人：林 玉惠（銘傳大学副教授）
発表要旨：本稿では、読解教科書、論説文、漫画を調査対象として
取り上げ、二種類のテクストタイプにおける語彙使用の
特徴を計量的に検討した。その結果、まず、読解教科書
においては、漢語の占める比率が最も多いものの、外来
語と混種語の割合は他のテクストタイプに比べて非常に
少ない。論説文においても漢語の比率が最も高い一方、
他のテクストタイプと比べ、和語の比率が少ないしながら
も外来語の占める割合がトップになる。一方、漫画にお
いては、和語と混種語の使用が圧倒的に多く、特に和語
の割合が漢語を上回ることに注意されたい。次に、漫画
における動詞比率、形容詞比率、感動詞比率が高いのに
に対して、読解教科書においては、副詞、接続詞、類体詞、
接頭語の比率が高い傾向を見せている。またテクストタ
イプを問わず、いずれも名詞率が大変高く70％を超え
ている。さらに、語彙の類似度を利用して異なるテクスト
タイプにおける語彙の関連性を検証すると、読解教科書
と論説文における語彙の類似度が最も似ており、読解教
科書と漫画間の類似度はそれに次ぐ。論説文と漫画間の
類似度が最も低いことが分かった。なお、中級の日本語学習者が習得しきったような語彙(＝既出語彙)を抜き出してから、再び類似度を算出すると、論説文と漫画間の類似度が逆転して、読解教科書と漫画間における関連性を上回った。論説文と漫画間の類似度が高まったのは、既出語彙を対象外とすることによって、その資料的性格が初めて本格的に浮上し、その性格が直接この結果に投影したと推測できるよう。

（３）第292例会
時　間：2013年3月16日（六）上午10:00－12:00
地　点：台北市YMCA城東會所008室（台北市松山街19號）
発表者①：金　想容（輔仁大學兼任助理教授）
発表者②：陳　曉勤（輔仁大學副教授）
発表要旨：台湾では2000年に入ってから、オタクを意味する「御宅族」、「宅男」、「宅女」、「阿宅」「宅女」といった言葉が世間に注目され始めた。そこで本発表は、まず台湾の新聞、テレビ、インターネットなどのメディアによる「オタク」の扱い方を総合的に整理し、そして台湾大学生を対象にアンケート調査及びインタビュー調査を行い、今後の「オタク観」、「オタク像」を考察する。考察の結果としては、日本の「オタク」に由来する「宅男」、「阿宅」といった言葉は、インターネットの普及と情報流通の迅速さによって顕在化してきた一種のサブカルチャーであり、そして日本のオタク文化が全面的に理解されていない上での、台湾本土のメディア及び消費者による混成の産物であると考えられる。また、「宅男」などの「日本ACGファン」、「内気で社会性に欠ける人」といった日本からの影響を受けている一方、「創造力がある、知能に優
発表者②：落合 由治（淡江大学教授）
題 目：マルチジャンル的言語研究のトレンドー文科系研究の発展のためにー
評 論 人：吉田 妙子（政治大教授）
発表要旨：現在、日本では研究、教育の分野でもグローバル化の影響を受けて「従来の領域の停滞」と「新しい領域への模索」という交代期の現象が見られる。これは日本語学や日本語教育など日本語に関わる部分ばかりでなく、他の領域においても同様の現象が見られ、大学は危機の時代を迎えている。その点では2012年の『日本語の研究』『日本語教育』に掲載された学会動向は非常に変化的である。そこでは「日本語研究の成熟」、「中心的な現象の分析から周辺的な現象の分析へ」、「コーパスの整備」という成熟、停滞の側面と、「言語構造重視から言語運用重視へ」、「単一的な研究方法から複合的な研究方法へ」、「研究成果の電子化の進展」という他領域との連携を模索する動きが拮抗している。本論文では、後者のマルチ・ジャンル的研究方法の一つとして『台湾日日新報』のビジュアル要素と広告、記事見出しの言語テクストとの関係を調査し、両者が密接な関係を持って20世紀前半のメディアテクストを形成していった過程を示した。他の領域と連携し学術の危機を乗り越える模索が今後は重要である。

（4）第293例会
時 間：2013年4月20日（六）上午10:00－12:00
地 点：台北市ＹＭＣＡ城中會所008室（台北市許昌街19號）
発表者①：鄭 智惠（大同大学副教授）
題 目：非日本語学科専攻の日本語教育ー大同大学を通してー
評論人：北嶋徹（関南大学教授）
発表要旨：台湾の一般大学そして科技大学では、日本語学科、応用日本語学科が数多く設立されている。それらの学科は、言語政策研究または第二外国語研究の題材としてよく取り上げられている。非日本語学科専攻の日本語教育は、従々にして表に現れないためか、研究対象にならないのが現状である。本発表は大同大学における日本語教育を取り巻き、非日本語学科の日本語教育の実態の究明に少しでも役に立てたらと思う。投人面、過程面、結果面の三つの側面から、「理工系色の高い」大同大学の日本語教育を論じ、問題提起をしたい。
発表者②：濱屋芳子（静岡大学兼任助教教授）
発表要旨：言葉遣いに関する日本の家庭教育は、男子に対してと女子に対してどのように違うかを、横浜の高校生へのアンケートにより、分析した。家族から言葉遣いについて注意されたことがあるかどうか、について質問した結果、「注意されたことがある」という回答は、男子43.2％、女子65.0％と、有意の差が見られた。ちなみに台湾の高校生は男子38.8％、女子38.1％と僅差であった。さらに日本の高校生の男女の違いは、注意された年齢に現れている。注意された、という回答の内、注意された年代について言及している者の総数を100とした場合、男子は54.5％が幼少時に注意を受け、高校生の現在では27.3％しか注意を受けていない。女子も幼少時の注意は55.6％多いものの、高校生の現在も44.4％が注意されると答えている。注意の内容について、特に女子には、乱暴な言葉を避けるように、という指導が多く見られた。
挨拶について、先生に「バイバイ」と挨拶して叱られた、
という答えが男子に2人あったが、女子には皆無であっ
た。言葉遣いについての注意を女子の方が多く受けては
いるものの、他方、教師への挨拶状況を見ると、女子の
方が男子より挨拶の言葉について、やや社懐な生徒が見
られ、どの先生にも挨拶するという答えが男子より少な
かったのは意外でもあり、興味深いことでもあった。

（5）第294例会
時　間：2013年5月18日（六）上午10:00～12:00
地　點：台北市YMCA城中會所008室（台北市許昌街19號）
発表者（1）：小林由紀（東吳大學兼任講師）
題　目：台湾の日本語読解教育における現状－先行研究の把握と
分析の見地から－
評　論　人：劉谷由裕（淡江大學教授）
発表摘要：本発表では、台湾における日本語読解教育の関係の先行研
究について、学会が出版する学会誌と各大学が出版する
機関誌から論文数と論文の内容を調査し、台湾における
日本語読解教育研究の現状を把握、分析した。その結果、
第1に、読解教育に関する論文が少なく研究が進んでい
ない状況にある。第2に、読解教育関係の論文には、初
級段階での「読む」教育に関する論文がないということ
が分かった。第3は、第2とも関連するが、初級から中
級段階に移行するレベルで、読解教育がどのように行わ
れているのかに関する報告が少ないことが判明した。第
4は、日本語教育と文学教育における「読解」の境界に
線引きがあるが、上級レベルになるとこの線引きが明確
でなくなる可能性が生じる点である。以上を俯瞰して、
今後は、台湾で研究が盛んに行われている日本語教育と
言語教育の分野において、「言語形式からのアプローチ
（なにを読むか）」にも目を向けた読解研究が望まれる。
発表者②：廖育卿（淡江大学助理教授）
題　　目：林崎外『青年』小泉純一の「夢」に現れた女性達を中心に
評　　論　人：范淑文（臺灣大學教授）
発表摘要：本研究では、『青年』における小泉純一の「夢」に現れた
女性達に関する「顔」を検討しながら、三人的女性達が
小泉にもたらした五感の刺激によって、「夢」に現れた女
性達の位置づけを明らかにした。その結果を改めて整理
すれば、次のようである。まず、小泉純一との初対面の
分析を通して、お雪さん、坂井夫人とおちゃんの「顔」
の輪郭を描き出し、そして三人の女性登場人物に現れた
五感の刺激を媒介として純一の女性への欲望を見出すこ
とが確認できた。坂井夫人を例として、最初に彼女の「懐
の目」である視覚の刺激から、次第に彼女から伝わって
きた聴覚、触覚、嗅覚、味覚に影響され、魅了され、
最後に肉体関係を持つようになるのである。また、そ
れを踏まえ、デカルトの『悟れ論』を援用し、「精神の受
動性」と「精神の能動性」（知覚と意志）の相互作用によ
って、坂井夫人への複雑な感情の脈絡が明らかにし、主
人公純一の情欲の内面を究明した。最後に、フロイトと
ユングの「夢分析」理論を踏まえ、純一の「夢」に現れ
た三人の女性登場人物の順番から、純一の心の深層にあ
る女性に対する本当の好み、若しくは理想的な女性像を
改めて確認することができた。

（6）第295例会
時　　間：2013年6月15日（六）上午10：00－12：00
地　　點：台北市YMCA城中會所008室（台北市新店街19號）
発表者①：神作晋一（南華科技大学助理教授）
題　目：尾崎雅嘉『古今和歌集講読集』の送り仮名
評論人：齋藤正志（中華文化大学副教授）
発表摘要：尾崎雅嘉『古今和歌集講読集』（寛政8[1796]）は『古今和歌集』の俗語訳を試みたものである。神作晋一（2005）では同じ俗語訳（口語文）の本居宣長『古今集遠鏡』の送り仮名を考察して、これまでの慣習を踏襲しながらも、口語の活用の特徴を考慮し接続関係をはっきりさせるなどの配慮で、送り仮名を多く送る傾向があったと述べたが、本研究では『鄙言』俗語訳部分の送り仮名を取り上げた。音節（文字）数・活用形式・活用形別・下接語の種類（助詞助動詞・下接語の漢字表記・かな表記であるかなど）、などによって分類し、送り仮名の傾向を分析・考察した。二音節動詞の送り仮名がほとんどなく接続がわからないものが多く、三音節以上の動詞はあくまで、これまでの慣習を踏襲した形で、送り仮名を適用していっている。読者に対する配慮というのではなく、理解できない一方、ある語形の（動詞）については、ほとんどすべてに振り仮名が施してあるという状況であった。今後は、文語で書かれた歌の部分や、歌と俗語訳両者を含んだ動詞のかな書きの部分も関わりを論じて研究することや同じ俗語訳である『古今集遠鏡』との比較・考察などの課題が残っている。質疑では、俗語訳の目的（利用の目的、どのような読者層への有意義）はどのようなものか、送り仮名や表記は（尾崎雅嘉の）個人的なものであるのか、などが出了。

発表者②：張瑜珊（新生醫護管理專科學校助理教授）
題　目：言語生態学の日本語教育実践研究への応用
評論人：羅曉勤（銘傳大學副教授）
発表摘要：日本語教育現場での教室内実践が今まで「実践報告」と
して扱われることが多い。つまり、教育実践は「研究」ではないと思われている。しかし、最近、「実践研究」という用語が多く取り上げられ、教育実践も「研究」だと認めつつある傾向にある。本発表は、まず日本語教育における「実践研究」とは何かを紹介する。実践研究の教室現場は何に基づきデザインされたか、またその実践現場をどう評価するのか、近頃、「言語生態学」という理念が用いられている。本発表では、言語生態学とは何か、その概略を説明する。その後に、言語生態学を理論的な枠組みとし、自分の教育現場へ応用したり、教育実践を検証したりする事例を紹介し、言語生態学が日本語教育実践研究への応用の実態を報告する。
編集委員会
召集人 曾秋桂
副召集人 林青樺 羅曉勤
編集委員 林雪星 落合由治 邱若山 王世和 孫寅華
 楊錦昌 賴錦雀 吉田妙子 范淑文 許均瑞
 内田康 齊藤正志
執行編輯 落合由治
助理編集 施信余 黃如萍 劉于涵

今号は、特別寄稿が 1 本、投稿論文は外部審査の結果、全投稿 14
本中、11 本が掲載された。今号の掲載率は 78.5% で、すべて学術論
文である。

台灣日本語文學報 33

出版者：台灣日本語文學會
理事長：曾秋桂
地址：25137 台北縣淡水鎮英華路 151 號
淡江大學日本語文學系
傳真：(+886) 02-2620-9915
網站：http://taiwannichigo.greater.jp/

法律顧問：劉于萱律師

出版日：2013 年 6 月 30 日
ISSN 1727-2262

發行所：致良出版社有限公司
JOURNAL OF JAPANESE LITERATURE & LANGUAGE IN TAIWAN 33

CONTENTS

Foreword
Tseng, Chiu-kuei The 33rd publication foreword............................................................... 1

Special contribution
Kato Norihiro Where does Haruki Murakami’s international popularity come from?: its literary and social background .......................................................... 3
Kinshui Satoshi The First/Last Decade of the Research of Role Language........................ 25
Komori Yoichi A discussion about the newest long novel of Haruki Murakami “Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage” from the point of view of Initiation : Rethinking of the relationship between memory and history...... 45

Research Articles
Tseng, Chiu-kuei An amplitude of Japanese literature after 311: The subject of the “nuclear power plant” in “Soredemo sangatsu wa mata” .......................................................... 57
Shimooka Yuka Puppeteer and Impostor: Akutagawa Ryounosuke and Kori Reishi .......... 83
Chang, Yat-ting The Creation of Hideo Levy’s Manshi express The Figure of “Mr Abe” .... 103
Lai, Jin-chinsh The degree expressions of Japanese adjectives: Unusual usage of Japanese adjective ........................................................................................................ 125
Wang, Shih-ho Exploring the use of Noun stop Form Sentence from the Context............. 151
Tsai, Pei-ching A Statistical Word Count Research On Japanese Textbook Reading, Editorial Texts, and Manga: Lexical Characteristics Among Different Text Types As Main Scope Of Analysis .................................................. 173
Luo, Ji-li The writing of Japanese load words in Hakka Dialect........................................ 199
Shih, Hsin-yu The Communication Strategy in a Remote Conversation Between Japanese Native Speaker and Japanese Learner: Focus on Adjustment being taken....... 225
Ochiai Yuji Some recognition of journalism in Japan to 311 earthquake disasters and nuclear power plant explosion: From statement comparison of the press and the intellectual community ................................................. 249
Lo, Hoiao-chin A study on incorporating conversation exercises involving interactions between language learners and native speakers into Japanese conversation courses: Exploring the characteristics of topic selection in a non-face-to-face conversation.......................................................................................... 275
Chien, Shiaw-hua A Study on the Shuyoshugi in Meiji 30 to 40: Focus on Matsunura Kaiseki 297

Activities Report
Abstract of report in regular meetings............................................................................ 323

June 2013

JAPANESE LANGUAGE & LITERATURE ASSOCIATION OF TAIWAN